

「英語の世紀」に生きる：親英語 vs. 反英語

中井 弘一

2010年7月5日付け朝日新聞の“Globe”に“Struggling with Globalization”との英語題に「『脱日本』会社の葛藤」と邦題が付けられた特集記事が掲載された。“Globalization”とは「脱日本」なのかと当時考えさせられた。その記事には三木谷氏の「世界中で様々な集まりがあるのに、日本の技術者は英語ができないという理由で行かなかったり、英語だからといって文献も読まなかつたりする。それじゃあダメです」との考えを推し進め、自社では英語を公用語にしたとあった。あれから5年、今や日本は「英語の世紀」の観がある。「効率化」を重んじる新自由主義が現代社会を席卷し、その新自由主義の下、国際競争力の向上が英語化推進派の論点であるようだ。ただ新自由主義は、効率優先で十分な議論や検証をあまりせずにその施策を推し進め、従わぬものは排除するというような傾向がある。英語教育においては、2020年から小学校で英語が正規科目として5・6年生に導入される。中学校でも英語の授業は原則英語で行うことが次期学習指導要領の改訂で検討されている。またこの6月5日、文部科学省は中高生の英語力を上げるための「推進プラン」を発表し、政府が想定しているほど英語力が伸びていない現状から、全国の中学3年生を対象に、「聞く・話す・読む・書く」の4技能の新しいテストを2019年度から導入すると発表した。教育改革を言及する最近の新聞記事の多くは英語教育に関するものである。書店でも、英語のhow to本や学習書が所狭しと並んでいる。

こうした昨今の英語教育推進一辺倒の風潮の中で、現在の英語偏重主義を問いたずす新書が立て続けに出版された。永井 忠孝(著)『英語の害毒』と施光恒(著)『英語化は愚民化日本の国力が地に落ちる』である。永井は、

- ・これからグローバル化が進むから英語ができないと生きていけない。
- ・従来の読み書き中心の英語教育は失敗だった。
- ・会話中心にやるべきだ。
- ・なるべく早くから英語を学ぶべきだ。
- ・ネイティブ・スピーカーに英語を学ぶべきだ。
- ・アメリカ、イギリス英語を学ぶべきだ

という英語に関してかなり画一的な考え方が行き渡っていることに対しもう一つ異なった見方があるのではないかと主張を展開している。施は「英語化を推進すれば、日本経済は急速に力をなくすだろう。多数の国民が母国語で活躍してこそ国家と経済が発展していくという現代政治学最前線の分析から逆行することになるからだ」と訴えている。

西洋文化の方が優れているのではと考える心理的傾向が日本人には強いと思われるが、果たして日本語は言語として英語より劣っているのであろうか。2015年7月22日朝日新聞朝刊に「知日派の日韓論—韓国の英文学者・羅英均さん」というインタビュー記事が掲載されていた。かつて自分たちの言葉を奪った日本を批判しながらも、羅さんは隣国の人同士が交流を通じて、お互いのありのままの姿を知る大切さを訴える。その中で、

明治以来の日本の翻訳文化はすばらしかった。多くの国の外国文学や思想を日本語で読めました。私が英文学を一生の仕事とする下地になったのも、父の蔵書だったシェークスピア全集(坪内逍遙訳)を、大学に入る前に読んだことでした。近代日本が発展した土台には西欧文化の巧みな取り入れがあった。それは韓国をはじめアジア諸国が認めるべきことだと思います。

と述べている。

鈴木孝夫(2014)は『日本の感性が世界を変える』の中で、「日本語があったから日本は欧米に追いつき成功した」と述べている。日本では確かに人文科学、社会科学、自然科学の三分野の学問を日本語で理解しその学びを深めることができる。日本語を通してのおかげで、こうした深い学びを日本では全国津々浦々どこにおいても行うことができる。鈴木はまた、中根千枝(1967)の『タテ社会の人間関係』を引用して、「日本語は、感情と情緒の表現に適している言語だ」と論じている。論理より感情をことのほか愛することでストレスのある社会生活で潤いを得ている。日本人の男女をあわせた平均寿命の総合順位は世界第一である。国民が健康でこうして長生きできるのは日本人の感情と情緒の特性に起因している。二項対立的なものの見方をせず、何でも受け入れる日本的な考え方こそ世界を救うのではないかと述べている。

先日の世界遺産登録のドイツでの選定委員会では、英語を母語としない両国が英語を通して交渉が行われた。通訳を通してではなく、お互いの母語ではない英語による表現の交渉は、英語母語話者でないものにとってそれだけで不利である。英語の表現を取り違えずに正確に理解し、使い切れるであろうか。また英語には交渉言語として曖昧な要素はないのであろうか。それでも英語がリングフランカの役割を担っていくのだろうか。江利川(2008)は、石川達之助(1906)の『正則独習英語教本』には「英語は二十世紀の世界通語、之を解せざる者は二十世紀の人にあらず」と記されていることを紹介している。100年前にも今と同じようなことが考えられていたのである。

大谷泰照(2010)によると、日本の英語教育は40年周期の往復運動をしているという。明治6年の「英語国語化論」前後から明治22年「大日本帝国憲法発布」までが「親英」時代、それから日清・日露戦争、明治末までが「反英」時代、大正デモクラシーが興り大正時代は「親英」時代、昭和2年藤村作の英語教育廃止論から太平洋戦争が終わるまでが「反英」時代、戦後から昭和49年「平泉渡部英語教育大論争」あたりまでを「親英」時代、そこから高度成長時代、バブル経済崩壊での平成3年あたりまでを「反英」時代、そのあとは「親英」時代が続いている。どうやら、これまでは日本の国力が増大し繁栄しているときは「反英」であったようだ。グローバル化の波の中、日本経済は景気が回復しているとまでは言えない状況である。経済は文化にまで影響する時代である。これから先、

日本の英語教育は 40 周年周期で振り子のように変遷していくものではないかもしれない。世界の事情を巻き込んだ「反英」の時代が来るのか、はたまた、さらなる「親英」時代になっていくのであろうか。少なくとも日本語という母語の文化は大切にして英語教育に臨みたいと思う。

■参考文献

- 江利川春雄(2008).『日本人は英語をどう学んできたか』研究社
- 大谷泰照 (2010) .「日本の異言語教育の歩みをどう見るか 40 年周期の往復運動」 大学英語教育学会『英語授業デザイン』英語教育学大系第 11 巻 大修館書店
- 鈴木孝夫 (2014) .『日本の感性が世界を変える』新潮社
- 施光恒 (2015) .『英語化は愚民化 日本の国力が地に落ちる』集英社
- 永井 忠孝 (2015) .『英語の害毒』(新潮新書)、新潮社

(なかい・ひろかず 教授／教員養成センター長)
